お札と切手の博物館ニュース

Banknote and Postage Stamp Museum News

Contents

特別展「お札の世界で宝さがし　7つの島の大冒険」より
「イスラム世界」のさまざまなお札

展覧会追録

明治150年関連施策展示（第3回）
「明治期印刷局の装丁技術」より
「大日本貨幣図の製造時の装丁の仕様について」

2018/12/1
Vol. 43

「イスラム世界」のさまざまなお札

平成30年7月18日（水）～9月2日（日）まで、第1回特別展「お札の世界で宝さがし　7つの島の大冒険」を開催し、お札に描かれる肖像やデザイン、偽造防止技術などを7つに分類したコーナーを「島」に見立て、世界中のさまざまなお札を紹介しました。

私たち日本人は特に、お札といえば肖像があるものと思いがちですが、世界のお札を見ていくと、必ずしもそうではないことがわかります。なかでも、イスラム教徒の多い国々では、宗教上の理由により、人物を避けて建築物や遺跡、風景などを主に描いたものや複雑な政治状況を反映したものなど、特徴的なお札が多く見受けられます。

ここでは、これらのお札を中心に、展示では詳しくお伝えできなかった部分を紹介したいと思います。

肖像のないお札とイスラム教

イスラム教は、今から約1400年前、現在のサウジアラビアの都市メッカで発祥し、アラビア半島から北アフリカ、アジア諸国へと広く伝わりました。世界には16億人以上のイスラム教徒がいるといわれており、キリスト教の次に大きな宗教です。

その礼拝場所であるモスクは、独特の形状をしたドームやミナレットと呼ばれる尖塔（せんとう）を特徴とし、イスラムを象徴する建築で、中東のお札にもしばしば登場します。

エジプトのお札では、国内の主要なモスク〔図1〕を表面に描いていますが、裏面は古代エジプト文明をテーマとし、ギザの大スフィンクス〔図2〕といった代表的な彫像や遺跡、ヒエログリフ（古代文字）などを描いています。

古代オリエント文明の栄えた中東には遺跡が多く、お札にもよく見られます。また、ナツメヤシもよく描かれるモチーフ〔図3〕ですが、乾燥した砂漠でも枯渇（こかつ）しない常緑の高木で、古代より「生命の樹」として崇（あが）められてきました。多くの石油を産出する国では、石油の掘削装置を描いたお札〔図4〕もあります。

聖典『コーラン』と偶像崇拝の禁止

イスラムの聖典『コーラン』は神の言葉を伝えるものですが、ここには、「神の像をつくり、それを拝むことを禁止する（偶像崇拝の禁止）」という一節があります。

〔図1〕　エジプト 200ポンド 2015年

〔図2〕　エジプト 100ポンド 裏 2015年

〔図3〕　イラク 50000ディナール 2015年

〔図4〕　スーダン 20ポンド 2011年
※右に石油掘削装置、中央に灌漑（かんがい）農業用の水車とピラミッドが描かれている。

唯一の存在である神の姿を人間が想像してつくってはいけないという教えにより、人間の絵や写真までも「偶像」と見なし禁止する国があり、肖像のないお札が多いのもこのためです。

装飾的な文様や文字のお札

人物や動物さえも描くことのできないイスラム教の世界では、アラビア語や文様そのものが主役であり、大切な存在です。『コーラン』は美しく装飾化されたアラビア文字で彩られ、イスラム建築の壁面は、アラベスクとも呼ばれる蔓(つる)草文様や幾何学的な文様、装飾文字で埋め尽くされています。

独自の文様を用いたウズベキスタンのお札〔図5〕や、アラビア文字を主体としたレバノンのお札〔図6〕には、こうした思想や文化も反映されているのかもしれません。特にレバノンでは、さまざまな民族や宗教の人々が共存する国家でもあり、特定の人物をお札の肖像とするのは難しいという事情も考えられます。

肖像のあるお札

このように、肖像のないお札が多いイスラムの国ですが、例外もあります。サウジアラビアは代々サウード家を王とする君主制の国家ですが、お札にも国王の肖像〔図7〕が描かれています。厳格なイスラム教国として知られるサウジアラビアですが、国王の肖像は特別に認められているようです。近隣のオマーンやバーレーン、ヨルダンでも同様に、国王の肖像のお札が使われています。

一方、トルコのお札には、初代大統領ケマル・アタテュルクの肖像〔図8〕が描かれています。トルコはかつてオスマン帝国として栄え、イスラム教国家として多くの国を支配していましたが、第一次世界大戦で敗戦後、「トルコ革命」によって生まれ変わりました。政教分離を実現し、イスラムの法律や暦、アラビア文字の廃止を決めるなど、アタテュルク氏の一連の改革により、トルコは中東でもっとも近代的な国家となりました。現在の「トルコ共和国」を築いたアタテュルク氏は、「建国の父」として今も国民に慕われています。

国家の最高指導者や国王の多くは、イスラム特有の装束を身に着けて描かれますが、アタテュルク氏はスーツ姿で描かれており、また建国にゆかりのある人物としてお札の肖像となっている点においても中東では特殊な事例であり、近代化されたトルコならではのお札であるともいえます。

隠された肖像

お札の肖像は、政治的な事情にも左右されますが、中東には肖像を消されてしまったお札があります。イランは現在、ホメイニ師の肖像〔図9〕のお札で知られますが、以前はパーレビ国王の肖像〔図10〕がお札に使

〔図5〕 ウズベキスタン 25スム 1994年

〔図6〕 レバノン 10000リーブル 1998年

〔図7〕 サウジアラビア 100リヤル 2017年
※サルマン・ビン・アブドルアジーズ・アール・サウード第7代国王の肖像が描かれている。

〔図8〕 トルコ 500000リラ 1998年

〔図9〕 イラン 10000リアル 2017年

〔図10〕 イラン 100リアル 1974年

われていました。第二次世界大戦後、アメリカの支援を受け、高層ビルや高速道路の建設など近代化を進めたパーレビ国王は、イランの経済を発展させましたが、後に「イラン・イスラム革命」が勃発し、国王は追放されました。それまでのお札に代わり、肖像とすかしの部分に文様や国章を刷り重ねたお札〔**図11**〕が作られ、国王の顔はすっかり覆い隠されてしまいました。

この国王を追放し、イランに革命をおこした人物が、ルーホッラー（ルッホラー）・ホメイニ師で、現在の「イラン・イスラム共和国」を成立させ国家の最高指導者となりました。イランでは今も全てのお札がホメイニ師の肖像です。イスラム教の中で「シーア派」と呼ばれる少数の宗派に属するイランでは、他の中東諸国とは異なり偶像崇拝の禁止にも拘（こだわ）らないため、肖像の入ったお札が使われ、革命後はホメイニ師の肖像を掲げる群衆の姿〔**図12**〕を描くなど、政権をアピールするようなお札も発行されています。

一方、国民によって肖像が塗り潰されてしまったお札もあります。リビアでは、1969年にクーデターをおこし国王を追放したムアンマル・アル＝カダフィ大佐〔**図13**〕が、約40年間にわたり最高指導者として政権を維持しましたが、2010年末、チュニジアで起こった事件をきっかけに始まった「アラブの春」と呼ばれる民主化運動の波がリビアにも押し寄せ、カダフィ政権は反政府勢力によって崩壊しました。

しかし、お札の肖像までもすぐに取り替えることはできません。リビアの人々は、カダフィ大佐の肖像をペンなどで黒く塗りつぶして使っていたということです。

2013年、ようやく発行された新しいお札には、「アラブの春」後の国民の姿〔**図14**〕が、裏面〔**図15**〕には平和の象徴である鳩と新たな国旗が描かれています。

このように、中東とその周辺国のさまざまなお札を紹介してきましたが、「偶像崇拝の禁止」という宗教上の特殊な理由により、イスラム世界のお札は、他国とは異なる様相が多くみられます。描かれている人物や対象物を知ることにより、その国が今どのような状況にあるのかも見えてくるように、宗教上の対立や内戦の絶えない国や地域があるなど、複雑な諸問題を抱える中東の情勢はお札からも伝わってきます。

（学芸員　佐藤さおり）

〔図11〕　イラン 100リアル 1979年
※肖像部分に幾何学文様、すかし部分にはライオンの国章が刷り重ねられている。

〔図12〕　イラン 2000リアル 1986年

〔図13〕　リビア 1ディナール 2009年
※政権崩壊後は、顔の部分を黒く塗り潰して使われていた。

〔図14〕　リビア 1ディナール 2013年

〔図15〕　リビア 1ディナール 裏 2013年

明治150年関連施策展示（第3回）「明治期印刷局の装丁技術」より

大日本貨幣図の製造時の装丁の仕様について

お札と切手の博物館（以下、当博物館）では、平成３０（２０１８）年が明治維新１５０周年を迎えたことから、年間を通して関連展示を開催してきました。

第３回目の今回は、装丁技術（本づくり）をテーマに、明治期の印刷局図書製品から、当時の装丁技術について取り上げました。

展示では、まず代表的な装丁の分類について、各種図書の実物に触れながら装丁を理解するコーナーを通して説明したほか、洋式の装丁技術を本格的に日本に伝えたお雇い外国人パターソンから伝授された技術により作られた製品を中心に、明治期印刷局の図書製品を紹介しました。

ここでは、展示でも触れた当博物館収蔵の大日本貨幣図の明治９年版**（以下、資料A）**について、取り上げます。

〔写真１〕　展示全景

〔写真２〕　実物に触れて装丁を理解するコーナー

（１）大日本貨幣図とは･･･

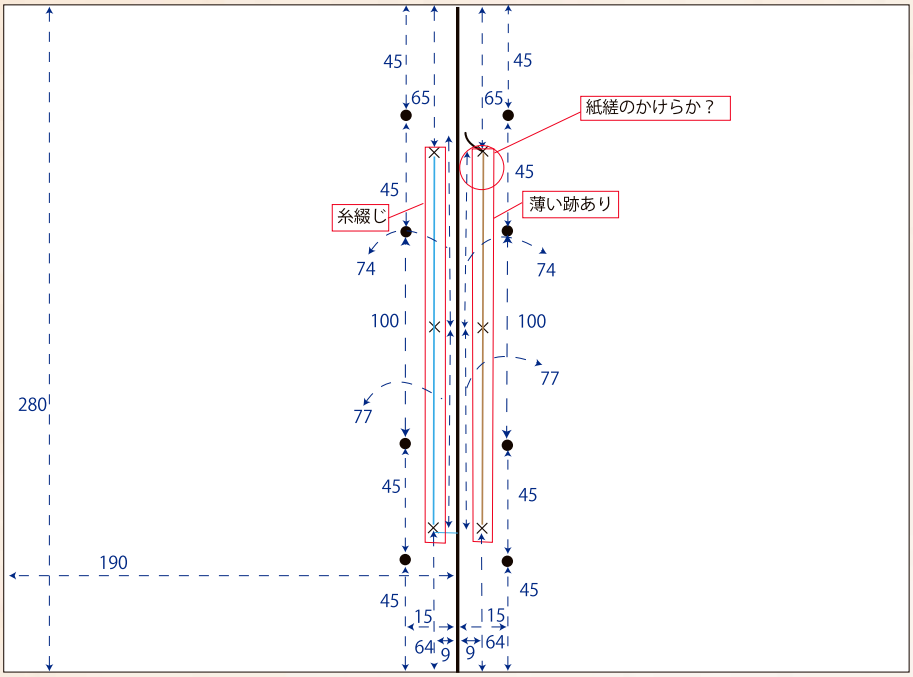
〔写真３〕　大日本貨幣図 明治９年版（資料A）表表紙

紙幣寮（国立印刷局の前身）で編纂（へんさん）された日本の歴代貨幣の図録です。

日本の貨幣史についてまとめられた本がそれまでなかったことから、当時の紙幣頭（しへいのかみ）、得能良介（とくのうりょうすけ）が編纂（へんさん）を指示し、「大日本貨幣史」が明治９（１８７６）年に発刊されました。しかし、その図版が白黒かつ、不鮮明で実物とかけ離れていたため、「大日本貨幣史」とは別に歴代貨幣を多色石版印刷で表したものが「大日本貨幣図」です。

当博物館では資料Aの他に明治１０年版を収蔵しています。本の内容に大きな変更は見られませんが、装丁は表紙の柄や題箋（だいせん）なども変更されています。特に資料Aに注目してみると、表紙の綴じ方からは和本の要素が、表紙で背をくるんだ装丁からは洋本の要素が感じられる変わった装丁の本です。早稲田大学図書館でも同本の明治９年版**（以下、資料B）**を収蔵していることがわかったため、これが本当に製造時の装丁の仕様なのか、資料Aとの装丁の仕様について比較調査を行いました。

（2）当博物館収蔵本の装丁の仕様



資料 A　（凡例：←→ 長さ（単位：mm），× 中綴じの穴，● 綴じの穴）

〔図1〕 大日本貨幣図（資料A）扉表紙ときき紙 図解

〔写真4−2〕 大日本貨幣図（資料A）（部分拡大）

資料Aは、地が青色の雲のような模様が入った布貼りの表紙で、背をくるんだ装丁がされています**〔写真3〕**。表紙と中身(*1)には、和本の四つ目綴じをしたような穴が開いていますが、綴じの糸は切れています。

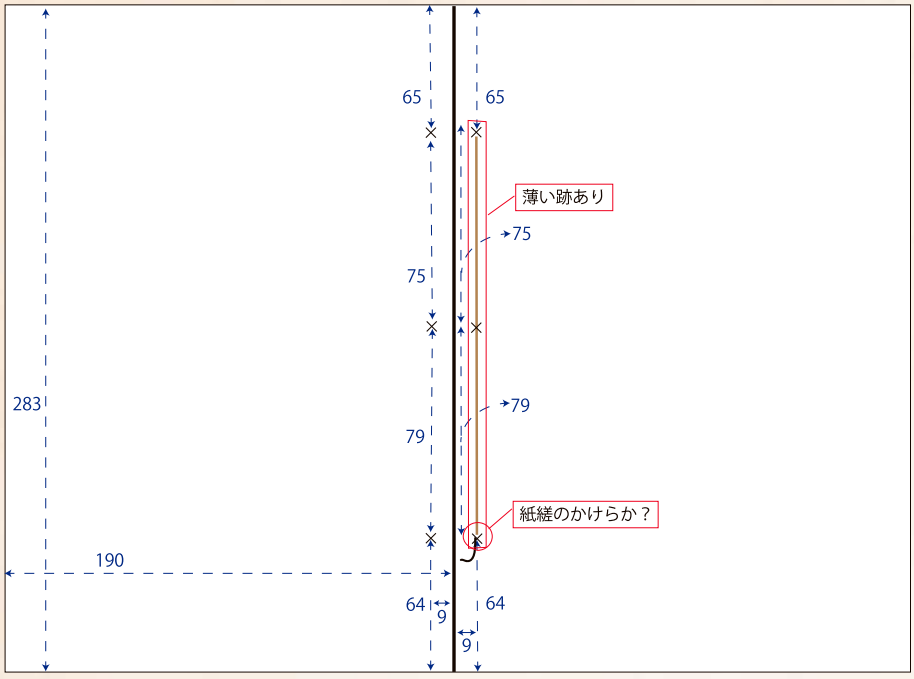
本の中身に注目すると、中綴じ(*2)として穴が3箇所開いており、中身を糸で綴じています。しかしきき紙(*3)にも同じ位置に穴が開いていて、その穴は裏から突かれた形をしています。また紙縒(こより)(*4)のかけらのようなものが出ていることからも、本来、中綴じは見返し紙から穴を通した形で綴じていて、現在の綴じは修補した跡なのではないかと考えられます**〔写真4−1、4−2及び図1〕**。

〔写真4−1〕 大日本貨幣図（資料A）扉表紙ときき紙

中身の本紙は、袋綴じ(*5)です。あそび紙(*6)が表表紙側にはありませんが、綴じが外れているため、損失している可能性もあります。なお、裏表紙側にはあそび紙が残っています。

(*1) 本の表紙に包まれる部分。(*2) 今回の場合、中身のみ綴じている綴じのこと。(*3) きき紙は、本の中身と表紙をつなぐために、表紙の内側に貼る紙である見返し紙のうち、表紙についている側のこと。(*4) 紙をよってひも状にしたもの。(*5) 本紙の裏面が白で、その面を内側に折り込んで綴じる方法 。(*6) 表紙についていない見返し紙。(*7) ノド（中身の背の綴り部分にあたる部分）近くに穴を開けて綴じる方法。

（3）早稲田大学図書館収蔵本の装丁の仕様と比較して

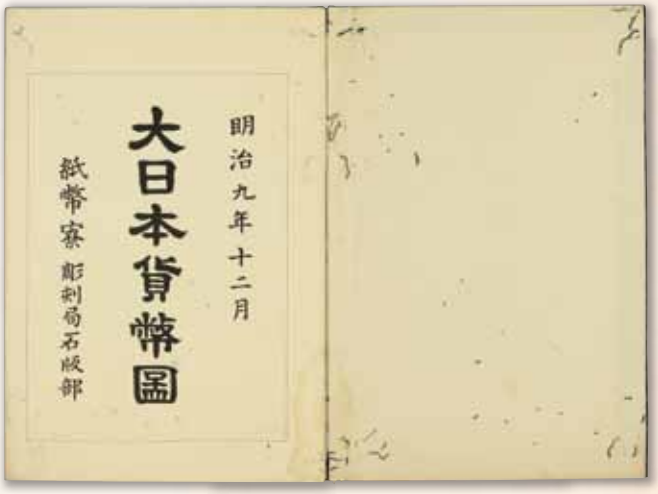


資料 B　（凡例：← － → 長さ（単位：mm），× 中綴じの穴，● 綴じの穴）

〔図2〕　大日本貨幣図（資料B）扉表紙ときき紙 図解

〔写真5−2〕　大日本貨幣図（資料B）（部分拡大）
早稲田大学図書館蔵

資料Bを資料Aと比較したところ、共通点は①表紙の柄や題箋（だいせん）、②中身の本紙が袋綴じであること、③表紙で背をくるんだ装丁であること、④中綴じの穴が中身ときき紙にあり、位置も資料Aとほぼ一致していることでした**〔写真5−1及び、図2〕**。このことから、製造時の装丁の仕様の痕跡と考えられます。資料Bについては中綴じの糸等が切れていましたが、資料Aと同様、きき紙から紙縒状（こよりじょう）のものが出ていることなどから、本の中身は、紙縒（こより）または糸で平綴じ(*7)され、それを表紙でくるんだ装丁であることが窺（うかが）えました。



〔写真5−1〕　大日本貨幣図（資料B）扉表紙ときき紙
早稲田大学図書館蔵

一方で相違点は［1］表紙・中身にあった四つ目綴じの穴がないこと**〔写真5−2〕**、［2］裏表紙側の見返し紙が表紙の背の部分に糊（のり）づけされた形で残っていたことでした。［1］は、資料Aには見られた綴じの穴が資料Bにはなく、綴じの穴を埋めた痕跡もないことから、資料Aの表紙の綴じの穴は後から開けたものではないかと考えられます。また［2］からは、中身が背に糊（のり）づけされていることを裏付けるものではないかと考えられ、これも製造時の装丁の仕様であったと窺（うかが）えます。

そのため、資料Aに見られた和本の四つ目綴じのような綴じ穴は製造時の装丁ではなく、散逸しないように、旧所持者が中身と表紙を綴じ直した結果、現在のような形になったのではないかと考えられます。

この比較から、明治９年版「大日本貨幣図」の製造時の装丁の仕様は布貼りの表紙で、本紙については袋綴じに折り、中綴じについては糸または紙縒（こより）で平綴じし、背を糊（のり）でつけ、表紙で背をくるんだ装丁であったと考えられます。

（学芸員　山田あさぎ）

COMING SOON
展覧会予告

平成30年度 第2回特別展

お札の色・切手の色 ～偽造を防ぐ技と美～

お札や切手の印刷に使われるインキは、他とは一線を画したインキです。それは、偽造を防ぐため、門外不出の製法によって開発する特殊製品であり、また、色と印刷を知り尽くした職人が編み出す特別な色だからです。

印刷局は、明治5（1872）年、日本で初めて洋式の印刷インキを製造して以来、およそ150 年にわたってインキの技術開発を続けてきました。

本展では、明治・大正期を中心に、当時編み出したインキや「色」にまつわる資料をご紹介します。時代を越え、連綿と続く伝統あるインキの美、「色の逸品」をぜひ実際にご覧ください。

印刷局のインキ事業開始の契機となったお札
明治5（1872）年

ご利用案内

入館無料

開館時間：9:30-17:00
休 館 日：月曜日（祝日の場合は翌平日）
年末年始、臨時休館日
※団体見学は、あらかじめお電話でご連絡ください。

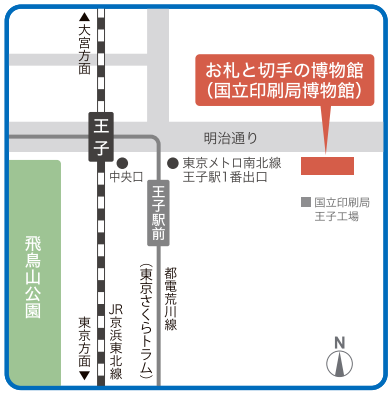
独立行政法人 国立印刷局
お札と切手の博物館
〒114-0002 東京都北区王子1-6-1
TEL.03-5390-5194
http://www.npb.go.jp/ja/museum/
お札と切手の博物館 検索

交通

JR京浜東北線「王子駅」（中央口）下車 徒歩3分
東京メトロ南北線「王子駅」（1番出口）下車 徒歩3分
都電荒川線（東京さくらトラム）「王子駅前」下車 徒歩3分
＊駐車場はありません。

常設展

偽造防止技術の歴史―印刷技術・製紙技術
偽造防止技術体験コーナー
重要文化財 スタンホープ印刷機
お札の移り変わり/世界のお札/
切手の移り変わり/世界の切手/
国立印刷局の歴史/世界のめずらしいお札/
お札の芸術
＊特別展開催時は一部展示の変更があります。



発　行：お札と切手の博物館（国立印刷局博物館）
発行日：平成30年12月1日
©2018
本書掲載の内容を許可なく複写、複製、転載することを禁じます。
※この冊子は再生紙を使用しています。